

空



2006年

**SORA** 13号

晴夜 (13) | 2

柴田 佐知子

志賀海神社

弓始海人族に灘いつもあり

はや鳥のこゑ降つてゐる注連飾

縦横に畳目のある雑煮椀

口結ぶ父の前なる据り鯛

手袋に思ひとどかぬ指満たす

牛の背のごつごつ歩む寒さかな

寒鯉の悪相なるが浮いてきし

日脚伸ぶ牛舎に牛の貌並び

冬ぬくし鳥が動けば籠揺れて

調  
律

荒井千佐代

鷹渡り了へし渚の砂かたし

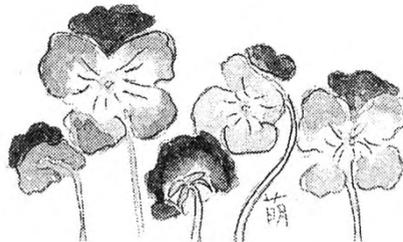
浦上や落葉はすでに地に還り

冬耕の鋤をよこたへ聖午鐘

児ら浜を駆けて来てメリークリスマス

木枯しや弥撒はアレルヤ唱に立ち

罪を犯しては寒紅をひきなほす



波寄するたびに暮れゆく龍の玉

年改まる亡き父の碁盤にも

保育所の矮鶏を見に來し大旦

文旦や雨粒いつか雨脚に

調律の音のやみたる鳥総松

冬灘へ父母亡き後の遠目癖

あかときの磯の匂ひや針供養

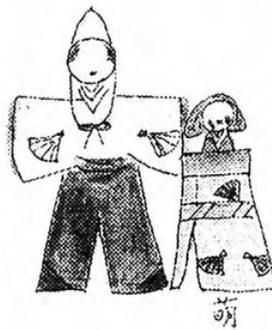
路の臺までの木橋のありにけり

吹き流され吹き戻されて冬の鴨

菩  
薩

秋  
千  
晴

満月の落ちてきさうな露天風呂  
菊膾座敷いつぱい陽の差して  
行事欄はみ出してゐる十二月  
雪載せて宅配便の届きけり  
落葉掃く背中に木の葉また降りぬ  
着ぶくれて夫送る手の短かかり



柚子湯出て体重計に母が乗る

餅を搗く青年団の腰高し

初日差す座敷のさらに賑はひて

夫は

恵方へと向きて菩薩を彫り始む

冬鴟や益軒像は本を積み

夜咄のぬくもり頬に家路かな

雪踏みし下駄のだんだん高くなる

湯気立ちて冬め厨の和らぎし

## 俎始

あさなが捷

足袋はきてすでに手順は決まりをり

大形につかみかかりし里神楽

窓に来る冬空をわが空とせり

曙を待たず俎始めかな

船過ぐる波に寒さのつりけり

いら立ちのをさまつてきし数へ唄



寒晴れやまとひしものを削ぎきつて

しあはせじゃないのね毛布掛けられし

目を閉ぢし瘦身のキリスト雪積む

初雪に小さき手形ふたつあり

暮れてより別れてよりの寒さかな

橋下を危ふく過ぐるこたつ舟

真つすぐな怒りのままに滝凍る

雪女郎ならば子を置き出られさう

大きな声にて入り来たる薔薇の束

## 曲水の宴

小林 朱 夏

大空をふらここ二基が交叉せり  
雲水の裾の汚れや春疾風  
早春の光を入れて瓶洗ふ  
笑ひ声とどきし梅のふくらめり  
明暗のきつちりとある猫の恋  
少しづつ子と折り合ひて春迎ふ



初節句泣くも笑ふも母の膝

仲良しの子等の風船違ふ色

単線に沿うて燕の来たりけり

式部居て源氏を見やる曲水の宴

春祭人より馬の跳ねてをり

鳥止まるそこは大事な牡丹の芽

笑ふ骨となつて朽ちたし花吹雪

雪柳散らして猫の逃げてゆく

藤の花重りて城隠しけり

# 耳鳴り

里中章子

田仕舞の煙のとほし海黒し  
着膨れて駿馬の脚を眩しめり  
正月の闇はなんだか有難し  
一月の空八幡の松高く  
くれがたの空や田町の雪達磨  
耳鳴りも愛しむ音や冬銀河



青竹の切口尖る薄氷

あたらしき青竹の棧玉椿

炉語りの佳境に狸出できたる

雛あられ告げざることを善しとせむ

湯煙の岨にひとすぢ花馬酔木

杉山の闇のはづれや露の臺

勾玉のやうな入江や梅三分

行平のふたりぶんなる薺粥

料峭や行平に粥のこりをり